巻頭言

諸先輩が築いた国際連帯の絆

IMF-JC 事務局長
若　松　英　幸

反日感情の激しい時代に、営々と築いた労働運動の思い出をつづった韓国の朴仁相ＫＯＩＬＡＦ委員長の本が日韓両国で出版され、記念パーティーが開催された。大韓造船公社から始まった朴さんの労働運動は、日本の労働運動リーダーとの密な交流を通じて深化していく。興味深いこの本を、多くの人に読んでもらいたいと思うし、パーティーに集まった金属労働運動の先輩諸氏の話は、生きた辞書として大いに勉強させられるものであった。

ＪＣの定期大会に招待した、シンガポールのリムさんもまた、自身の人生を振り返り、日本の多くのリーダーに、労働運動のあるべき道を指導していただいたと、感謝の念を述べておられた。

話は変わるが、何気なく点けたテレビに懐かしい風景が写っていた。東京都の面積より広いエリアに広がる巨大なキノコ型の奇岩、キリスト教の弾圧を避け、１万人以上が生活していたとされる巨大地下都市カイマルク、紀元前４～５百年前に栄えた古代都市エフェソスの遺跡群。魅力にあふれた国トルコは、知る人ぞ知る親日国でもある。旅の先々で、子供たちが瞳を輝かせながら「ジャポン、ジャポン」と言いながら寄ってくる。

明治23年（1890年）の秋、トルコから明治天皇表敬訪問のため来日していた、オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が、和歌山県の串本沖で沈没した。浜に打ち上げられた500名を超える遺体、負傷しながらも生き延びた69名、村人たちは断崖を何度も往復しながらこれらの人々を背負い、弔い、看病し、子供の着物まで持ち出して着せ、乏しい食料の全てを拠出して、手厚くケアしたという。この話は、トルコの小学校で今でも教えているし、日露戦争での日本海海戦の勝利、日本人の倫理観との共鳴などもあって、日本に対する親近感が強いのだと現地ガイドに聞いた。

テレビでは、イラン・イラク戦争での日本人救出劇も報じていた。1985年３月17日、48時間の猶予期限以降に、イラン上空を飛ぶ航空機への無差別攻撃を宣言するフセイン大統領に対し、各国は競って自国民の救出にあたったが、日本は安全が保障されないとの労組の反対もあって、救援機を派遣できずにいた。空港で路頭に迷う200名以上の日本人を救出するため１機のトルコ航空機が飛来、期限ぎりぎりでトルコに脱出、「日本人の皆さん、トルコへようこそ」との機長からのアナウンスにみなが感動の涙を流したという。15年を経たいま、取材を受けた初老の男性は「本当に有難かった」とうつむき、以降は涙で声が出なかった。

いま、わが国は中国との間で、様々な摩擦が沸き起こっている。尖閣諸島をめぐる事件、反日デモ、レアメタルの輸出制限、日系企業における労使紛争などである。今年、中国は日本を抜いて世界第２位の経済大国になったが、今のままでは、巨大な中国の存在が、アジアおよび世界にとって、大きな不安要因となっていくことは間違いない。

こうした中でわれわれがなすべきことは、中国の労働者組織との交流を密にし、市場経済における自由にして民主的な労働運動のあり方について、理解の促進を図り、情報交換・意見交換を深めることであり、また、ロシア、韓国、台湾、ＡＳＥＡＮ、インドといった国々との連帯の絆を一層強化していくことであると考える。

日本には毛利元就の「３本の矢」の教訓が伝わっている。１本の矢を折ることはたやすいが、３本合わされば容易に折れない。毛利家の３兄弟が協力しあって家を支えるように諭したこの言葉は、グローバル化が進む社会での国の連帯強化をも示唆するものである。経済は明らかにアジアで沸騰している。経済が強くなれば周辺諸国との摩擦も多くなる。前述のトルコの例を引くまでもないが、我々は平和な今こそ、多くの仲間と誠意と連帯の輪を強固に築いていく必要があると痛感する。

朴仁相ＫＯＩＬＡＦ委員長の「労働運動ひとすじ」出版記念パーティーにて
（2010年11月、東京）